

### インタビュー 西由起子さん

編集部 (E) 西先生には、フェリス・フラウエンコアの皆さんと一緒に、CD『教会福音讃美歌』全5巻で演奏していただきました。素晴らしい演奏をありがとうございました。先生は、東京芸大とドイツで音楽を学ばれたのですよね。

西由起子 (N) 国立音大で一年学んでから芸大に行きました。芸大を卒業した後、二期会のオペラスタジオに三年いて、芸大大学院に入りました。大学院では岳藤豪希先生から宗教音楽を学びました。修了後に一年おいてドイツに留学しました。ドイツでは、プライベートでアダ・ツァッペリ先生という、ザルツブルグの歌劇場でも歌っておられたイタリア人の先生につきました。声が出なくなってしまった時に、声を直してくださる先生ということで、ツァッペリ先生を紹介していただきました。

#### ■宗教音楽と信仰

E 宗教音楽との出会いはいつ頃でしたか。

N 小学2年から高校3年までの十年間、小田原少年少女合唱隊で、ルネッサンスやバロックの宗教音楽を歌っていました。そのころは、キリスト教のこともまったく知らなかったんですけど、宗教曲は素敵だなあと感じていました。

E 信仰を持たれたのは、いつ、どんなきっかけだったのでしょうか。

N 救われたのは大学4年の春です。きっかけは、妹が留学先のハワイで救われて、帰ってきて家族に証しをするようになったことです。その頃は、家の中もバラバラで、自分の内側にも憎しみや不安がいっぱいあって、心の汚い自分にはキリスト教なんて無理と感じていました。それが大学3年の夏休みで、4年の春になって、学食でクリスチャンの同級生と先輩と私の3人でキリスト教の話をしたんですが、その時に、何も分からなくて、帰ろうと思って「喉が痛いから帰るね」と言ったら、「喉のために祈ろうか」ということになって、食堂の地下の聖書研究会の部室でお祈りしてもらったんです。お祈りの途中で、なぜだか自分でも分からないんですけど号泣していったんですね。それまで辛いことや悪いことは因果応報で、神さまは裁きの神だと思ってましたけれど、その時、わたしはあなたを呼んでいるという愛のまなざしを感じて、神さまが、さばきの神ではなくて愛の神であることが理屈ぬきに分かりました。信じたのはその時ですね。それから教会を紹介してもらって、通うようになりました。

E 大学院で岳藤先生の授業を受けられたのは、その後なんですか。

N 岳藤先生との出会いがなければ、音楽面でも信仰面でも今の私はなかったと思います。それまではバッハの

#### CONTENTS

	Page
・インタビュー	西由起子 1
・「ハレルヤぼうや」連載をふり返って	高尾由希子 4
・編集作業の道のり 第8回	中山信児 5

曲でも端正に歌うことを心がけてきましたが、先生を通して、パッションとテキストの大切さを教えられました。先生はとても純粋で、幼子のような信仰をもっておられて、そんな風に讃美して、作品にも向き合っていくものだと教えられました。音楽修辞学についても大切なことを教えていただきましたし、発声のことでも、私は上半身と喉で歌う癖が抜けなかったんですけど、岳藤先生から、喉に負担のかからない歌い方を教わりました。最初のレッスンの時「左の足首を痛めたことがあるでしょう」と聞かれて、昔ひびが入ったことがあったので驚きました。発声について発想の転換をさせていただきました。

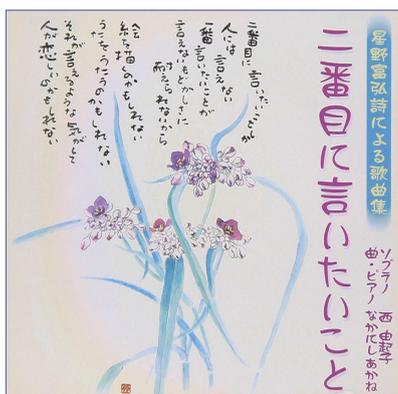
E そこからドイツへ留学されたのですが、ドイツで一番学びたかったのは何ですか。

N 私は、論文もドイツ歌曲で書いて、卒業試験もドイツ歌曲を歌ったので、ドイツの環境の中でドイツ歌曲を中心に勉強をしたいと思いました。実際にドイツ語でしゃべって生活しながら、ドイツ語のリズム感やイントネーション、ドイツ人の気質などを感じながら、ことばと文化のつながりを体験を通して学びました。

## ■歌曲と日本語

E フェリスで教えるようになったのは、留学から帰ってすぐでしたか。

N いいえ、帰ってすぐに県立高校の臨任教諭を1年して、その後に茅ヶ崎のミッションスクールで5年教えました。それが終わる頃に、なかにしあかねさんと星野富弘さんのCD「二番目に言いたいこと」を出して、少し間が開いて、2007年の春からフェリスで教えるようになったので、この春でちょうど10年になりました。



E なかにしさんも芸大の同級生ですね。

N はい、なかにしさんのご主人の辻さんも同級生です。CD『教会福音讃美歌』第1巻の四重唱でテノールを歌ってくださった辻さんです。

実は、なかにしさんは、私の独唱曲より先に、星野さんの詩で無伴奏の混声合唱組曲を書いているんです。彼女たち夫妻と私も入っていた声楽アンサンブルで歌った時に、そこから一曲、私がこれを独唱用にして欲しいとお願いしたのがきっかけになって歌曲集が生まれました。詩を選ぶときは、彼女の家に行って、星野さんの絵ハガキやいただいた資料を並べ

て、これとこれとこれ、みたいな感じで、とても幸せな作業でした。

E そうやって新しい日本の歌曲が生まれたわけですね。お話を聞いていて、秋岡陽先生が『自分の歌をさがす』(Ferris Books 4)の中で西洋音楽と日本語の関係について書かれていたことを思い出しました。私たちの讃美歌も日本語が前提になっていますけれど、演奏されていかがでしたか。

N 讃美歌って深いのにとてもシンプルなので、いかに表現するかということを勉強させていただきました。『教会福音讃美歌』のCDでも、節を繰り返す中で、一節はこう歌ったけれど、二節はこういう意味だからこう歌おうとか、演奏する側の理解が求められているように感じました。

E 讃美歌の場合、普通の会衆が楽譜を見て、しっかり解釈して歌うということは、なかなかできませんが、今回のCDでは、ひとつのお手本を示していただけだと思います。

ところで、私は、西先生の演奏会には一度しか伺ったことはないですけど、録音に立ち会ったり、CDを聴いて感じるの、日本語がとても綺麗で、ことばがすごく伝わってくるようなのですが、特に心がけておられることはありますか。

N 私たちの学生時代は、日本歌曲がオペラやドイツ歌曲より軽く見られていたようなところがあって、歌の中で日本語を美しくしゃべることのできる人が、今より少なかったと思います。自分も教わった発声法で日本歌曲を歌うのがとても難しく、一方で伝えたい気持ちはすごくあって苦労しました。星野さんの歌は92年頃から歌っていますが、自分も教会に通うようになると歌う機会も増えました。また、日本語で歌うととても喜ばれ、自分が感動する以上に涙を流して聴いてくださるという経験もありました。星野さんの詩では、特に自分が詩画集で見て感動したものを伝えたいという気持ちがあって、思い返すと、星野さんの詩や讃美歌を歌ってきたことが、日本語の詩を心から歌うということ育ててくれたのだと思います。

E 日本語の歌を歌うための発声法というのは確立されているのでしょうか。

N されていないと言うべきだと思います。日本歌曲の先生方も発声はベルカントとおっしゃっています。ただ、そのままだと日本語が不自然になるので工夫します。日本語の場合、支えからポーンと声を通せば出るというのではなく、もう少し慎重にポジショニング、つまり共鳴する場所を決めておかないと不自然になります。例えば「あ」の時は、ここからここまでしか使えないということがあります。日本語として自然に聞こえるように歌おうと思うと、使える範囲が狭いという感覚です。日本語は、どうしても喉でしゃべりますので、そこに落ちてしまうと、喉が締まってしまいますので、そこを広げながら、ちゃんとしゃべる場所を見つけるまでに苦労しました。

E それが発声とことばをリンクさせるということに繋がるわけですね。今、日本語で歌おうとしていらっしゃる方に、何かアドバイスがあればお願いします。

N 詩の中のキーワードを、自分の中できちんと把握する、あるいは決めることが大切ですね。私はもともとピアノ科に行きたかった人なので、音から入ってしまうんですが、歌曲も讃美歌もテキストが大切なので、学生にも朗読することを勧めています。一旦、音を外して朗読して、大切なことばを自分なりに見つけて、咀嚼して、どういう風にそのことばをしゃべるかを考える。

E こうしてお話していても、西先生はことばをととても大切にしておられると感じました。

N あまり意識はしていないのですが、授業などでは成るべく飽きないようにしゃべることを心がけています。最初に教えたのが中学生だったので、それまで合唱団で音楽好きの人しかいなかったのに、音楽嫌いの子もいる。楽しいことや笑ったことは頭に残るので、そういう子どもたちにも楽しいと思って欲しいという気持ちがありました。音楽嫌いだった子が一年経って楽しかったって言うてくれると、すごく嬉しかったですね。

## ■様々な音楽

E 音楽のジャンルについてですが、先生は、ポップスや歌謡曲もかなり聴いておられますね。



### 西由起子 プロフィール

東京芸術大学音楽学部声楽科卒業、同大学院独唱科修了後ドイツに留学。日本音楽コンクール声楽部門第2位、奏楽堂日本歌曲コンクール第3位、国際モーツァルトコンクール女声部門第3位（オーストリア）など国内外にて多数入賞。現在、日本・ドイツ歌曲を中心に宗教曲ソリストとしても活躍、「NHK-FMリサイタル」「題名のない音楽会」等メディアにも出演。これまでに日本歌曲、讃美歌などのCDをリリース、中でも星野富弘詩による歌曲集「二番目に言いたいこと」は詩人を始め、CDジャーナルなど各方面で絶賛されロングヒットとなっている。故木村宏子、辻宥子、桑原妙子、A.ツァッペリの各氏に師事。日本演奏連盟会員。フェリス女学院大学大学院及び玉川大学講師。ホームページ <http://www.nishiyukiko.com>

N はい。私が芸大生の頃はカラオケが流行っていました。聖子ちゃんや明菜ちゃんや百恵ちゃんも聴きました。

E じゃあ、フラウエンコーアがテレビで歌謡曲とかも歌っているのも、その流れなんですか。

N あれは、また別です。でも、そうですね。自分が聴いてたんですから、もうちょっと寛容にならないといけないですね。教員としては、やっぱり学生のうちは自分の勉強のことをしっかりしなさいみたいって言ってるんですけど。

E 西先生の学生時代は、皆さん、わりといろんなものを聴いていらっしやっつた。

N 大学の三年生の時には、同級生とマンハッタン・トランスファーをコピーして学祭で歌いました。その後、ライブハウスでも演奏して、ボズ・スキヤッグスとかも歌いましたね。今回の『教会福音讃美歌』にはポップス系の讃美も入っていて、いろいろな出会いがありました。塩谷さんが演奏された「たとえば私が」(395番)も大好きです。リラの讃美も好きですね。

E 最後になりますが『教会福音讃美歌』について何かコメントがありましたらお願いします。

N 最初、CDレコーディングのお話をいただいたときには、こんなに大きなプロジェクトになるとは思っていなかったんですけど、大学の大きな休み毎に讃美歌としっかり向き合わせていただいたことと、大切な働きに携わらせていただいたことがとても幸せでしたし、これからこの5巻のCDが用いられていって欲しいと思います。

E そうですね。今日はありがとうございました。

## 「ハレルヤぼうや」連載をふり返って

4コマ漫画「ハレルヤぼうや」の掲載は、『福音讃美歌ジャーナル』の創刊準備号から休まず続いてきましたが、この度、誌面のリニューアルにともなって『福音讃美歌ジャーナル』でのお役目をひとまず終えることになりました。お別れの特別企画として、作者の高尾由希子さんをお願いして、連載を振り返っていただくとともに、特に印象に残っている三作を選んでいただきました。高尾さん、長い間の執筆、ありがとうございました。ハレルヤぼうやにも、また、いつかどこかで会えるでしょう。その日を楽しみにしています。(編集部より)

高尾由希子(旧姓 長澤) 東京ライトハウスチャーチ会員

2004年から2016年までの大変長い間、「ハレルヤぼうや」連載の機会を与えられて、本当に感謝しております。ハレルヤぼうやは、キリスト者の交わりを通して生み出されたキャラクターです。世田谷中央教会の青年会やK GKで、ちょこちょこイラストを描いてきました。教会の「祈りのページ」という読み物の編集会議で、4コマ漫画をというチャレンジを受け、描くようになりました。その読み物が中山先生の目に留まり、「福音讃美歌ジャーナル」へとスカウトしてくださったのです。

連載が始まって3年後、要約筆記がきっかけとなり、難聴者である夫との結婚に導かれました。今、通っている東京ライトハウスチャーチでは、『教会福音讃美歌』のような歌集は使っておらず、賛美の歌詞はスクリーンに表示されます。夫が会衆とともに神様を賛美するとき、最も抛り所になっているのは響きです。演奏が空気の振動となって指先の皮膚や胸板に伝わることで、今、どの歌詞を歌っているのかを知るのだと言います。なかなか想像がつかない世界ですが、私も声楽のレッスンでは、響きを意識するように教えられています。ひとつひとつの音に空気の綿をつけて、遠くに飛ばしていくイメージです。礼拝スタイルは違っても、主に向かって歌う姿勢を大事にしていきたいと思います。ハレルヤぼうやは、これからも、短い手足で天を仰ぎ、「ハレルヤ」と神様を賛美していきます。主に栄光がとこしえにありますように！

# 「ハレルヤぼうや」作者の選んだ三作

2004年11月 創刊準備1号

2008年10月 第7号

2015年10月 第20号

大学卒業後、キリスト者学生会（KGK）の事務局に8年勤めました。30代に入って、仕事を離れ、神様との関係を見つめ直すようになってから、新しい道が少しずつ開けてきました。ひとりで静まること、人といっしょにいることのバランスを大事にすると、ご飯もおいしく食べられます。神様は本当に良いお方です。

夫は果物、特に柿が好きです。忘れた頃に干し柿を出すと大喜びです。農夫である神様は、私たちの現在と将来の姿を視野に入れて刈り込みをされるお方だと聖書に約束されています。私たちの願い通りにならなくても、「御国が来ますように、御心が成りますように」と神様のご計画に心を合わせていきたいです。

愛媛県にある道後温泉には、坊っちゃん電車が走っています。「坊っちゃんが温泉でポチャン」と、夫はダジャレを言って面白がっていましたが、私はそれを漫画にする気にならず悩みました。違いを違いとしてそのまま喜びたいという思いになり、「ぼうやは ぼうやのままでいてね」というセリフが生まれました。



あはたのあはは 祝福とあは (8/112:2)

## 1. 翻訳と編集

『教会福音讃美歌』では、18名の翻訳者が、全506曲中168の歌詞を新たに翻訳しています。翻訳者は、主にJEACSの正会員である3つの団体（日本福音キリスト教会連合、日本同盟基督教団、イムマヌエル綜合伝道団）から選ばれました。

讃美歌翻訳という作業は、ほとんどの訳者にとって初めての経験でした。旋律を伴い、節が有って、型が定まっている詩（有節定型詩）の翻訳は、散文の翻訳よりもはるかに制約の多い困難な作業となります。本来ならば十分な経験を積んだ訳者が、時間をかけて取り組むべき作業ですが、我々にはあらゆる面でのリソースが不足していました（経験、人材、時間、資金）。制約の多い中で作業を効率的に進めるために、編集サイドで、「讃美歌翻訳について」という文章を作成して翻訳者にお渡ししました。その中から、翻訳に際して特に留意していただいたポイントを以下に紹介します。

## IV. 日本語としての留意点

## A. 分かりやすいこと

1. 可能な限り中学生にも理解できる表現。
2. できるだけ口語化する。ただし、文語は排除しない。混在も可。
  - a) コンテンポラリーな作品では原則口語。人称代名詞も口語化。
3. 原詩に於ける詩的な表現、難解な比喩などは平易な表現に変えても良い。
4. 歌う時に句読点が無くても意味がとれることが望ましい。

## B. 美しいこと

1. 歌った時の響きの美しさ。
2. 極端な語彙、表現はできるだけ避ける。ただし歌詞の内容が求める場合はその限りではない。
3. 同じことばが不用意に連続していないか。
4. 自分の悪いクセがでていないか。
5. 美しさは、内容をより良く伝達するためであって、美しさそのものを求めるのではない。

## C. 歌いやすいこと

1. 確定したチューンでの歌いやすさを追求する。
  - a) 声に出して何度も歌ってみる。
  - b) 色々なアレンジを聴きながら歌ってみる。
  - c) 人に歌ってもらって聴く。
  - d) 礼拝に集う会衆（老若男女、求道者から伝道者）にとっての歌いやすさを考慮する。
  - e) 初見で意味がとれること。できれば聴くだけで意味を間違えずにとれることが望ましい。
2. 母音の連続、濁音、撥音、促音などとメロディーとの関係をチェック。
3. 歌詞の意味と、音型、音楽の構造は乖離していないか。

上記のような作業を経て訳出された歌詞は翻訳者の祈りと努力の結晶です。それぞれに主張があり、思い入れがあるものです。それらを審査し、あるものは採用し、あるものは改善ポイントを指摘して書き直しを求め、あるものはボツにするのが、編集者の仕事です。分かりやすさにも、美しさにも、歌いやすさにも評価のための客観的基準はありません。けれども、それらを個々の翻訳者の判断に委ねてしまうと、玉石混濁で統一感の無い讃美歌集になってしまいます。そこに編集の重要性があります。編集者には、自分の主観的な判断基準を常に高め、維持することが求められます。同時に、讃美歌集が編集者の主観だけに左右されることがないように、提出された歌詞を公正に審査する責任があります。讃美歌編集者には、自分を高めつつ謙り、心を開きつつも、評価においてぶれることなく、長短を見極め、欠点を明確に指摘することが求められているのです。

## \* 会計報告 \*

2016年4月～2017年3月

### ■収入の部■

科 目	2016年度予算	2016年度実績
会員負担金	1,060,000	1,221,000
(正会員)	(750,000)	(750,000)
(準会員)	(60,000)	(60,000)
(賛助会員)	(250,000)	(411,000)
自由献金	230,000	253,600
その他	200,000	170,623
当年度収入合計 (A)	1,490,000	1,645,223
前年度繰越金	472,208	472,208
収入合計 (B)	1,962,208	2,117,431

### ■支出の部■

科 目	2016年度予算	2016年度実績
理事会費	125,000	62,608
委員会費	350,000	292,124
人件費	360,000	380,000
事務費	300,000	254,937
ジャーナル発行費	460,000	431,952
カンファレンス開催費	200,000	164,627
総会開催費	20,000	10,038
JEA 関係費	62,000	35,000
経常支出合計	1,877,000	1,631,286
特別支出 積立金	0	0
予備費	0	0
当年度支出合計 (C)	1,877,000	1,631,286
当年度収支差額 (A) - (C)	- 387,000	13,937
繰越額/残高 (B) - (C)	85,208	486,145

#### ●賛助会費納入者 (2016年4月～2017年3月)

都賀キリスト教会、キリスト教朝顔教会、菅生キリスト教会、馬天キリスト教会、インマヌエル立川キリスト教会、インマヌエル聖宣神学院キリスト教会、浜田山キリスト教会、世田谷中央教会、インマヌエル板橋キリスト教会、下北沢聖書教会、結城福音キリスト教会 (教会 11件)

刑部照美、齊藤眞木子、福田崇・愛子、稲垣博史・緋紗子、横倉知恵、大賀勝範、山村雅彦、藤本侃也、倉富隆子、熊谷邦男、寺村秀嗣、本間昭弘、小川宣嗣、樋口邦彦、石川岩夫、南場安正、辻喜男、高橋和江、菅原早樹、インマヌエル聖宣神学院キリスト教会婦人会 (個人、その他 20件)

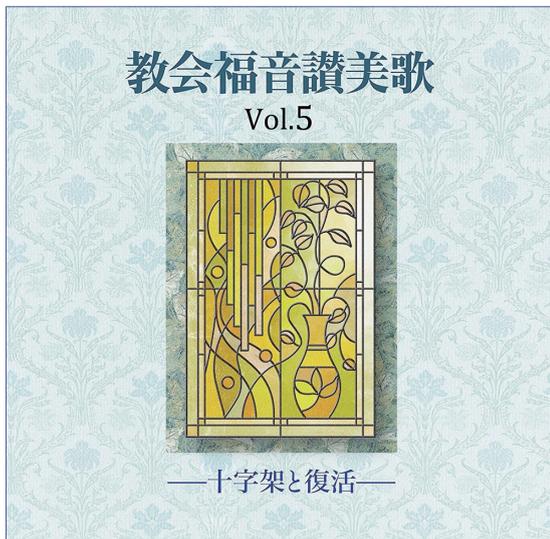
#### ●献金者 (2016年4月～2017年3月)

武蔵台キリスト福音教会、たまプラーザキリスト教会、日本福音キリスト教会連合、泉キリスト教会、インマヌエル岐阜キリスト教会、インマヌエル熊本キリスト教会、安藤能成、竹内滋、西川晴子、匿名 (10件)

お名前の掲載を希望されない場合は、通信欄に匿名希望とお書きくださるか、メール (info@jeacs.org) で、その旨をお知らせください。

# CD「教会福音讃美歌」Vol.5 『十字架と復活』

2017年1月発売 ライフクリエーション 2,700円(税込)



諸教会で親しまれているレパートリーに加え、内外の優れた作品、現代の創作讃美歌を多数収録した新しい讃美歌集『教会福音讃美歌』より、十字架と復活を深く味わうための16曲を収録。十字架と復活の情景が目に浮かぶような、心に迫る賛美がささげられています。十字架と復活を覚えつつ、感謝と喜びと希望をかみしめながら聴きたい感動の1枚。

1. 十字架の上の神の小羊 (123番)
2. 主イエスのかしらに (115番)
3. 緋の衣 (116番)
4. 苦しみの中で祈る人々に (428番)
5. 目ざめてたたえよ (153番)
6. この日夜は明けて (152番)
7. 輝きのこの日 (146番)
8. まどろむ世界に (154番)
9. 主のよみがえり (139番)
10. ときわのいのちを (145番)
11. 暗やみ過ぎ去って (144番)
12. 主の十字架のなやみを (128番)
13. イエスよ、みくにに (223番)
14. 暗やみに輝く灯 (129番)
15. イエスの十字架の深き恵み (132番)
16. 主の復活、ハレルヤ (150番)

## ■福音讃美歌協会◆会員募集◆

- ◇会員には次の三つの種別があります。正会員(教会、教団・教派等)、準会員(超教派団体、グループ等)賛助会員(趣旨に賛同し支援して下さる教会、個人等)
- ◇賛助会員のお申し込みは、入会申込書をご請求いただき、必要事項をご記入の上、郵便またはFAXでお送りください。承認の後、年会費のお振込みにより入会が完了いたします。
- ◇正会員、準会員のお申し込みにつきましては、協会へ直接お問い合わせください。

福音讃美歌協会 (JEACS) 〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台 2-1 OCCビル 602号室  
Tel.03-5341-6920 Fax.03-5341-6921 (いのちのことば社出版事業部内)  
ホームページ <http://jeacs.org/> メール [info@jeacs.org](mailto:info@jeacs.org)

### ◆郵便振替口座◆

番号 00220-1-95127  
名称 福音讃美歌協会

### ◆郵便貯金口座◆

番号 10500-82654721  
名称 福音讃美歌協会

### ◆みずほ銀行 ユーカリが丘支店◆

普通預金 番号 1604668  
名称 福音讃美歌協会

## From Editor

前号から「福音讃美歌ジャーナル」誌面のリニューアルに取り組んできましたが、本号からフルカラーでお届けできるようになりました。ご期待ください。今回、巻頭を飾った写真は、フェリス女学院大学学長の秋岡陽先生が撮影されたものです。美しい写真の使用を快諾してくださったことを、心から感謝いたします。インタビュウを受けてくださった西由起子先生は、CD『教会福音讃美歌』1巻から5巻まで全巻に、独唱と指揮で参加してくださいました。西先生の演奏の一番の特徴は、ことばの美しさとその表現力にあると言えるでしょう。インタビュウでは、その秘訣にも触れてくださっています。インタビュウは西先生の所属教会である大和カルバリーチャペルで行われました。会場を提供してくださった大川従道先生はじめ、スタッフの皆様から感謝申し上げます。「ハレルヤぼうや」とは、今回の特別企画でしばしのお別れとなります。連載を10年以上続けることができたのは、高尾姉の誠実なお仕事ぶりによるものですが、コメントからも伺えるように「ハレルヤぼうや」はご夫妻の共同作業ともいえるものでした。長年の感謝とともに、主の祝福をお祈りいたします。(な)